

平成18年7月18日

南三陸町長 佐藤 仁 様

南三陸町まちづくりワークショップ
リーダー 後藤 一磨
サブリーダー 佐藤 かつよ

「まちづくり提言書」について

南三陸町まちづくりワークショップ設置要綱（平成18年南三陸町告示第23号）第4条に規定する南三陸町総合計画基本構想に関する提言書を別紙のとおり提出します。

まちづくり提言書

平成 18 年 7 月

南三陸町まちづくりワークショップ

目 次

前 文	1
I. まちづくりの方向性	2
II. まちづくりの将来方向	4
III. これからのまちづくりの目標	6
IV. まちづくり推進に向けての要望事項	13
V. おわりに	14
資料 まちづくりの方向性の具現化に向けての意見、提案、アイデア	15

一前 文一

南三陸町では平成19年度を初年度とする南三陸町総合計画の策定にあたり、町民が基本構想への提言を行うという町民参加型の手法を取り入れました。

「南三陸町まちづくりワークショップ」は、この目的を達成するため、町の呼びかけ（委員公募）に対して自主的・積極的に参加した人たちにより結成した会議です。

私たち南三陸町まちづくりワークショップは、平成18年5月11日から7月7日までの間に、全7回の討議を行いました。参加者の多くの発言機会を確保するために、出席者を2つのグループに分けて各人が主体的に議論に参加できるようにし、この2つのグループで出された意見を取りまとめるという形式で会議を進めてきました。また、この会議以外に、会議のメンバーによる自主的な検討会も開催し、その結果についても会議の中に話題として取り入れてきました。

また、会議では、まちづくりの問題点・課題を身近な視点から捉え、「まちづくりにあたっての基本的な考え方」、「取り組むべき施策」等について自由に意見、提案、アイデアを出し討議してきました。

この提言書は、このようにして進めてきたまちづくりワークショップの成果を取りまとめたものです。

本提言書が南三陸町のまちづくりに関する住民の意見として、南三陸町総合計画策定において十分に反映されることを期待いたします。

また、本提言書の検討にあたり、ここで示されたまちづくりを実施していくためには、様々な分野で活動している町民がネットワークを組み、行政とともにまちづくりを進めていくことが必要であるということを実感しました。

本提言の内容を町の住民が自らの課題として受け止め、共に考え、行動に取り組むことにより、町民の手でまちを創り上げていくことを希望いたします。

平成18年7月18日

南三陸町まちづくりワークショップ一同

I. まちづくりの方向性

これからの南三陸町が目指すべき“まちづくりの方向性”として、次の内容を提言します。

南三陸町には、海・山に代表される豊かな自然環境があります。長い歴史の中で私たちはこれら自然の恩恵を受けながら暮らしてきました。水産業や農林業をはじめ、私たちの暮らしやなりわいは常にこの自然を背景として、循環・繋がりの中で営まれてきました。

しかしながら、私たちは、経済の発展、経済合理性を求めるあまり、自然に負荷をかけ過ぎるような産業や生活を押し進めることによって、自然と人の繋がりを忘れ、煩わしいという理由で地域の安全安心の源泉であった人と人の繋がりを軽んじてきたのではないのでしょうか。このような動きは私たちの町に限ったことではなく、全国的更には全世界的な風潮となっています。その結果、地球規模で環境破壊が問題とされ、わが国の安全神話も崩壊し、食の安全性すら危ういものとなっています。私たちはかつてない新しい不安といつも隣り合わせの生活を送らざるをえない状況にあります。

その一方で、近年では循環型社会のお手本として、わが国の江戸時代の生活様式が世界の注目を浴び、かつての日本人が実践していた自然との共存した生活のあり方を世界が評価しています。また、近年、わが国でも大都市圏を中心にスローライフといった自然環境と共生した持続可能なライフスタイルや価値観を大切だと考える人々が増えています。本格的なスローライフを営むため、田舎暮らしをはじめめる若者や中高年の数も増加しています。

さらに、地域の防災防犯、安全安心な食の供給など様々な分野において、地域社会の見直しがはじまっています。

このような様々な動きを踏まえ、私たちも、これからのまちづくりを考えるにあたり、もう一度、足元にある南三陸町での生活の良いところを改めて見直すことにしました。

このような観点から、南三陸町の生活を振り返ると、町に古くから根付いてきた文化のひとつに“面倒見^{めんどみ}”と“御返し^{おかえし}”という思いやりの文化がありました。一般的には、他人のために行う有形・無形の支援を意味する“面倒見^{めんどみ}”と、その支援を受けた人が示す有形・無形の感謝の気持ち“御返し^{おかえし}”として用いられてきました。また、先人から受け継がれたこの文化は、人間同士の関係に限らず、人間と自然（大地、海、川、山）、人間と社会など、暮らしのあらゆる場面で息づいていたものだったと言えます。

“^{めんどろみ}面倒見”と“^{おかえし}御返し”、これらは言うなれば、暮らしの中で関わり合う人どうしの繋がり、さらには人と自然、社会との繋がりを大切にし、その関係性の中で自らが幸せな暮らしを送るという南三陸町ならではのスローライフのあり方を考える大きなヒントではないでしょうか。

まちづくりの原点は、町民にとって住みよい地域を創り・守ることです。私たち町民自らが、南三陸町という地域での暮らしを楽しみ、愛することがまちづくりの原動力となり、それがおのずと自信・誇りに繋がり、外に向かってもその魅力が浸透していくのです。

私たちは、先人たちから引き継がれた歴史・文化・自然と自分たちの暮らしやなりわいとの深い関係性を見直し、その価値を大切にする中で、相互の関係を紡ぎながら魅力ある南三陸町、魅力ある暮らしを創っていくことを望んでいます。

したがって、南三陸町まちづくりワークショップでは、以上の基本的な考え方をもとに、

自然・ひと・なりわいが紡ぐ 心豊かな暮らし・誇れる地域

をこれからの南三陸町が目指すべき姿としたいと考えます。

II. まちづくりの将来方向

I. で示した南三陸町が目指すべき姿を実現していくためには、次のような考え方でまちづくりを進めることが重要だと考えます。

1. 住民一人ひとりが共に汗を流し、協働の取り組みで創り上げるまち

南三陸町には、様々な智恵ややる気を秘めた住民がたくさんいます。しかし、これらの人々は、一人あるいは少数の範囲で活動しているケースが少なくありません。まちづくりにそんな新しい息吹を吹き込み、全町的な動きに広げていくためには、小さな芽（点）を協働の取り組み（面）に発展させていく必要があります。

官民協働と言われて久しいですが、官と民の意識には未だ隔たりがあるようです。また、住民が主体となって地域で展開されている様々な活動も周囲の理解が得られず、大きな活動に展開しない例が見られます。

これからのまちづくりでは、町内外に開かれた思いやりの心で、すべての町民がお互いを認め、皆が同じ目線・同じ土俵に立つことが必要です。行政も住民も大人も子どもも共に汗を流し、思いやりを大切にし、お互いを高め合う、温かい心の繋がりを大切にしながら、より良い町を創ろうとする小さな芽を広げ、協働の取り組みに育て上げていくことを提案します。

2. 自らの暮らしの安心・安全を支える土台の整ったまちづくり

厳しい社会経済状況が続き、将来的にも、雇用の場の不足、少子高齢化の進行など、不安な要素が山積しています。このような状況だからこそ、まちづくりの基本として、そこで暮らす住民の日々の暮らしを支える安心・安全の環境を確保することを、今まで以上に重視していくことが必要となっています。

暮らしの土台づくりとして、安心・安全な環境の中での家族の暮らし、集落の暮らしがあり、さらに町民一人ひとりが自分たちの暮らしを楽しみ、誇りに思える環境を一つひとつ整えることが大切です。

これからのまちづくりでは、防災から治安、交通、あるいは暮らしに役立つ情報の得やすさなど、安心・安全な町民の暮らしの舞台となる社会基盤が充実したまちを目指すことを提案します。

3. 豊富な資源の“循環”・“繋がり”による南三陸“らしさ”が息づくまちづくり

豊富な自然環境の恩恵を受けた第一次産業、これらの資源を活用した観光や自然の恵みを生かした食品の加工・販売など、現実の町の産業は相互に連携し合いその繋がりの上で成り立っています。こうした繋がりをもっと重視していくことが、新たな産業創出の芽や雇用創出において重要なことだと考えます。

これからのまちづくりでは、グローバル化する社会・経済の中で、自立（自律）

していく、腰の強い地域経済を生み出していくことが強く求められます。

私たちは、こうした観点から、従来の個別産業の枠にとらわれず、人・モノ・カネ・情報の有機的な繋がりを大切に、地域性や独自性にこだわった“南三陸型”のなりわいを創出していくことを提案します。

4. 心が通い合った“支え合い”・“思いやり”の息づくまちづくり

子どもと大人、女性と男性、障害者と健常者、みな南三陸町で暮らす仲間です。また、弱者にとって住み良いよいまちは住民すべてにとって暮らしやすいまちになります。

医療や福祉、子育ての環境の遅れは、やる気や能力のある高齢者や障害者、女性などの社会参加の障壁ともなります。また、未来を担う子どもたちが健やかに育つ環境づくりも私たち大人の使命です。

これからのまちづくりでは、年齢、性別、障害の違いや有無にとらわれず、ごく当たり前にお互いを思いやり、支え合う中ですべての町民が同じ舞台（地域）でいたわり合いながら育ち、暮らせるまちの実現を目指すことを提案します。

5. 日々の暮らしの中で自然を敬い、次代に繋ぐまちづくり

南三陸町の豊かな自然環境は、私たちの暮らし、産業、地域の文化と深い関係性の中で潤いをもたらしてくれています。そして、長い歴史の中で、相互の循環・繋がりを保ちながら先人たちによって受け継がれてきました。

しかし、この豊かな資源は、普段の暮らしの中であまりに身近な存在であるため、私たちはその価値の大きさにまだ、十分に気づいていないのかもしれない。

これからのまちづくりでは、南三陸町での暮らしを楽しみ・誇りに思い、その良さを実感するためにも、私たち自らが、この恵まれた環境を愛し、日々の暮らしの中で繋がりを持ち、その価値を次代に誇りを持って継承できるまちづくりを進めることを提案します。

6. 南三陸町を舞台に多様な交流を通じて支え・高め合う人づくり・まちづくり

南三陸町の高齢者や女性の中には、第一次産業をはじめ、様々な分野で活躍する（してきた）名人と呼ばれる人たちがいます。今後、ますます高齢化や人口減少の進行が予想される中で、高齢者、主婦、その他一芸に秀でた人々は町の大きな財産となります。

これからのまちづくりでは、このような「人財」を活かし、子どもからお年寄りまで、すべての住民がある時は教える立場となり、また、ある時は教わる立場となり町の魅力を再認識することが重要です。このことを通じて、町に対する誇りを醸成すると同時に、埋もれた「人財」を発掘し、町内外の交流に活かすことで、“南三陸町＝人財の宝庫”と言われるまちづくりを進めることを提案します。

Ⅲ. これからのまちづくりの目標

ここでは、Ⅱ. で示したまちづくりの将来方向のそれぞれについて、今後、基本構想や基本計画の検討において重視していくべき、まちづくりの目標を整理しました。

この目標を町民と行政が共有し、その達成に向けてまちづくりを推進していくことを提言します。

1. 住民一人ひとりが共に汗を流し、協働の取り組みで創り上げるまち

①誰もがまちづくりに参加できるまちを目指す

定年退職する団塊の世代、子育てが一段落した母親、若い頃の知恵や技を活かしたい高齢者など南三陸町にはまちづくりに参加したいと心の中で考えている人々が多くいます。これからのまちづくりでは、こうした「目覚めた町民」の想いを受け止めていく場を役場以外にもたくさん創り出していくことが重要です。

NPO組織や地域住民が主体となった様々な協議会など、まちづくりに対する住民の想いを受け止める実践の場を、住民自らが率先して創り出すことが必要です。

②立場を越えた様々な対話が盛んなまちを目指す

南三陸町にはまちを活性化するために必要な人・モノ・情報はたくさんあります。しかし、これらを活かすためには、異業種交流や世代間交流、あるいは地域間交流などを通して、お互いを理解し、認識しあうことが重要です。他人の意見にも耳を貸し、優れた意見には立場を越えて支持をしていく、南三陸ならではの気風を生み出すことが必要です。このため、住民、行政、業界団体などが、自らが率先して、もう一步踏み出し、様々な対話の場に積極的に参加することが必要です。

③協働の理念のもと、住民と行政が暮らしの質の向上に共に取り組むまちを目指す

南三陸町では、個人やグループが始めた活動が、まち全体に広がり、持続することがあまり多くありません。その背景には、住民自らが積極的に社会参加し、お互いの力を出し合ってまちづくりに取り組む姿勢が弱いことがあげられます。今後、まちづくりにおける住民の責任は、さらに大きくなっていくと思われます。まちづくりに対する理念を行政と住民が共有し、本音の対話を重ね、意見をぶつけ合うことで個人間、団体・組織間、官民の間における信頼関係とパートナーシップを育み、これを基礎として、様々な主体が自由にまちづくりや生活の向上に取り組んでいくことが必要です。

④目標に向かって住民と行政が一緒に活動できるまちを目指す

私たちは日々の生活を通して、住民の目線からまちづくりの様々なアイデアを考えています。しかし、誰に相談したら良いか分からない、何から始めた良いか分からない、最初の一步をどのように踏み出せば良いか分からないため、アイデアの多くは実行できないままにしています。

そこで、私たちは、高い専門性と豊富な知識をもつ行政に、優れたアイデアをいち早く見つけ出し、はじめの一步を踏み出すための支援や人と人、人と情報を繋ぐ支援、アイデアを具体化するための情報や知識の提供など、目利き、コーディネーター、まちづくりシンクタンクとしての役割を發揮することを期待します。また、このような役割に特化していくために、職務遂行に適した人員配置、広く全体を見る視野をもった人材の配置、町民の要望を検討する仕組みの整備など、行政は自らの仕事を見直して、行政がやるべき仕事を選択し、持てる資源を集中することが必要です。

2. 自らの暮らしの安心・安全を支える土台の整ったまちづくり

①他人の安全安心を考えられるまちを目指す

人口減少、高齢社会へ向かう中、地域に住む高齢者や子育て家族を地域が支えていくことが、地域社会の持続にとって最も重要な取り組みになります。そして、他者を思いやる心や人と人の繋がりが地域社会の安全安心の源泉であったことを再認識し、地域社会が自らの力によって、その土台を立て直していくことが、これからのまちづくりの重要なポイントの一つと考えます。住民自らが安心安全について考え、具体的な体制づくりを進めていくために、地域コミュニティに着目し、その役割の見直しや機能強化を進めることが必要です。

②食の重要性を理解し、健康管理ができるまちを目指す

医食同源の言葉のとおり、健康は食から始まります。南三陸町は四季折々の安全で安心な食材を提供する豊かな自然環境に恵まれています。この長所を住民が十分に理解し、まちの誇りとして、まちで取れる自然の恵みを毎日の食に取り入れることが必要です。このような行動を通じて、住民が自らの健康づくりを進めるとともに、地産地消による地域資源の循環を促し、持続可能な地域社会づくりへと繋げていくことが可能になります。このためには、自然や食の重要さに町民が気づき、具体的な行動を起こすよう、食農教育や生活習慣病予防のための生活改善など、町ぐるみの健康づくりを進めることが必要です。また、こうした取り組みは、将来的には医療費の削減や長寿のまちづくりを展開することも可能にします。

③誰もが自由に街なかを移動できるバリアフリーのまちを目指す

まちの活気には、人と人の繋がりや円滑なコミュニケーションが欠かせません。今後、高齢化が進行していく中で、歩きやすく、利用しやすい交通手段があることは、高齢者の外出を助け、高齢者の活力をまちづくりに繋げる基礎的な条件整備として重要です。また、人と人の交流を活発にするためには、街なかに高齢者や障害者を暖かく迎え入れる心のバリアフリー化も必要になります。たとえ、病気やケガをしても、また、心身に障害があっても、誰もが自由に街なかを移動できる歩道や交通手段などを整えていくことが明るく活気あるまちづくりには欠かせない取り組みとなります。また、街なかだけではなく観光スポットや自然と親しむレクリエーション施設などでも積極的にバリアフリー化を進めていくことが必要です。

3. 豊富な資源の“循環”・“繋がり”による南三陸“らしさ”が息づくまちづくり

①地域の農水産物が地元で活かされ、食の魅力を享受できるまちを目指す

まちの田畑や海の恵みを活かした豊かな食生活のあるまちづくりを進めていくことは、まちの強みを生活の質の向上に結びつけていくために重要です。住民自らがまちの農水産物の価値を再認識するとともに、その気づきを促すため、生産者との顔の見える関係、生産者からの情報発信、生産の体験学習など、様々な面で住民と農水産業との繋がりを創出することが必要です。

②異業種連携で弱点を補い、まちの資源を活かしきる地域産業の息づくまちを目指す

町内の産業・企業の個々の活動だけでは、地域経済を取り巻く環境の変化や多様化する消費者ニーズに対応していくことが難しい時代となりつつあります。個々の事業体としての自立性を高めることに加えて、業種、業界を越えたネットワークを形成することが重要です。このような異業種間ネットワークづくりを通じて、新たな商品開発や付加価値向上のために生産者と消費者との協働や連携を意識的に強めることも必要になります。これからの地域産業は、業種や業態、生産や消費といった立場を越えて繋がることで、価値ある財やサービスを生み出し、地域性や独自性にこだわりながら特色ある総合産業化を目指すことが必要です。

③自らの手で創り上げ、胸を張って誇れる観光地や交流型産業のあるまちを目指す

豊かな自然環境や多彩な山海の幸に加え、例えば、ゴミひとつない美しい景観、心から安らげるおもてなしなど、住民の努力と創意工夫によって、来訪者にまちの良いイメージを印象づけていく、地域が一体となった「観光のまちづくり」を進めることが重要です。このためには、観光に関係する仕事に携わる住民のプロとしての意識を高めていくことが必要です。加えて、観光に関係する仕事には直接関係がない一般の住民の方々も、観光がこれからのまちの成長産業のひとつとして重要な

ものであるという認識を持つことが重要です。住民一人ひとりがまちの観光ガイドとしてまちの魅力を来訪者を伝える、そんな意識づくりも考えていく必要があります。

加えて、来訪者にまちの情報を伝える総合案内施設や観光標識の整備、まちの観光をコーディネートする観光プロデューサーの養成なども進める必要があります。

④若者の起業や創業にチャレンジしやすいまちを目指す

これまで地元での若者の就業の場としては、既存企業が誘致してきた企業の選択という発想が中心でした。しかし、若年人口の流出傾向が長く続くことが示すように、これらの就業の場が今の若者にとって魅力的なものであったのかというと、十分なものではなかったと言わざるを得ません。

若者にとってやりがいのある職場となる産業を確立していくためには、既存の産業の延長や企業の誘致といった従来型の発想ではなく、まちの資源や既存産業ノウハウを活用して若者や後継者が積極的にアイデアを出し合い、新しい産業の創業や起業を推進していくこと、これを支援していく必要があります。

かつて、南三陸町は様々な事業に挑戦する殖産興業のまちでした。その殖産の気概を再興し、若者がチャレンジしやすい環境づくりとそのチャレンジをまち全体で支援する仕組みづくりが必要です。

4. 心が通い合った“支え合い”・“思いやり”の息づくまちづくり

①医療に対する不安のないまちを目指す

高齢化の進行に伴い、今後、医療ニーズはますます高くなっていくことが予想されます。また、少子化は、総需要の低下を招き、町内で産科や小児科が開業することを一層困難にします。このことが、まちでの出産や子育てをする上での若いお母さんたちの大きな不安要因となっています。このような現状に加え、万が一の病気やケガに対する住民の不安、医師の不在、通院などに対する不安も少なくありません。このため、医療に対する不安のないまちづくりを進めるため、開業医の誘致などを通じた医師の確保や町内の既存医療体制の更なる強化に努める必要があります。また、広域連携の推進などにより、十分な医療サービスが受けられる体制づくりも必要です。

②高齢者や障害者が自立した生活を営む環境が充実したまちを目指す

高齢者や障害者の社会への参加が可能なまちづくりを進めるためには、十分な医療・福祉サービスを楽しむこと、一人ひとりの状況に応じた社会活動や就業の場が確保されることが必要です。また、高齢者や障害者が可能な限り地域において自立した生活を営めるように、地域全体で支える仕組みづくりを進めていくことも必要です。

③安全安心な保育の場と子育てネットワークが充実したまちを目指す

南三陸町においても、核家族の増加により子育てサービスに対するニーズは都市部と同じような傾向になりつつあります。子育てしている女性が仕事やまちづくり活動などの社会参加のために、安心して子どもを預けることができる場を官民で創り出していくことが必要です。また、子を持つ親だけが子育てに関わるのではなく、子育てをする親同士の助け合いや、お年寄りが子育て家族を支援するといった活動の拠点となる子育てネットワークの核となる場を創ることも必要です。

こうした拠点づくりについては、新しい施設を整備するのではなく、既存の公共施設や商店街の空き店舗など、今あるストックを活用していくという視点が重要です。

5. 日々の暮らしの中で自然を敬い、次代に繋ぐまちづくり

①誰もが自然の素晴らしさを享受し、楽しむことができるまちを目指す

まちの自然の真価は、住民一人ひとりが学び、理解することによって初めてもたらされるものです。そこから、他人や来訪者に、その魅力を伝えたいという気持ちが生まれます。住民の誰もが自然の素晴らしさを学び、伝えることができるようになるためには、学校や地域が連携し、大人から子どもまで多くの人が学び、楽しむことができる学習の場を創り出すことが必要です。

このことを通じて、子どもたちの豊かな感性を育むまちづくり、来訪者にまた来たいという思いを抱かせるまちづくりを目指すことが重要です。

②美しくなつかしい自然の価値に気づき、伝えることに努力しているまちを目指す

心の豊かさが強く求められる時代において、南三陸町の暮らしの質を高めていくためには、目に見える風景や景観を整備していくことも重要です。

今は少なくなって気がつかなくなってしまった景観資源、そこに居るだけでホッと空間など、誰もが一つは心の中に持っていた大好きな風景や場所を語り合い、拾い集めていくことが必要です。このような取り組みを通して、まちのあちこちにあった美しくなつかしい自然の価値をもう一度評価し、これを積極的に伝えていくことが必要です。

③歴史的な資源の価値を理解し、今に活かす知恵のあるまちを目指す

白壁の蔵、茅葺き屋根、季節の移り変わりを告げる祭や行事など、普段見過ごしている歴史文化的資源はすべて先人たちが私たちに残し伝えてきた、かけがえのない南三陸町の貴重な財産です。これからのまちづくりにおいては、自然資源と同様に、これらの財産について、ただ古い物として捨て置いたままにするのではなく、意識的にその価値を学び、新たな視点から価値を付加することで、今に活かしていくことが必要です。

④森の恵みを地域で活かすことを通して森を守るまちを目指す

町の約80%を占める森林は、かつては多様な広葉樹から成り立ち、人々に木材、炭、山菜やキノコなど様々な森の恵みをもたらし、また志津川湾の豊かさを支えてきました。しかし、社会経済や生活の変化の中で、森は暮らしから遠く離れ、間伐等の人の手も入らなくなりその荒廃が進んでいます。かつての森との関係性に多くの住民が気づき、具体的な行動を起こすことが、南三陸町の自然全体を守るうえで重要です。森づくりを「林業」という枠組みだけではなく、むしろ道路や漁港と同じ重要な生活基盤を維持するものと考え、森の社会的価値を認めること、そして、意識的に森を使うことを通して森を守る意識と仕組みを具体化することが必要です。

⑤地域の資源をエネルギーとして活用することのできるまちを目指す

現在、全国的に太陽光発電や風力発電など環境に優しいエネルギーの生活への取り込み、技術の開発が進んでいます。南三陸町では間伐されなくなった森、周辺市町では行き場のなくなった畜産廃棄物などバイオマスエネルギーとして活用できるものの、まだ未活用となっている資源がたくさんあります。家庭や行政や企業などがこうした資源をエネルギーとして活用することを真剣に考え、自然環境を保全しつつ地域エネルギー産業という新しい産業と雇用を生み出す新たな切り口としていくことが必要です。

6. 南三陸町を舞台に多様な交流を通じて支え・高め合う人づくり・まちづくり

①地域で学校を支える教育環境が整ったまちを目指す

少子高齢化や他の市町から通勤する先生の増加により、学校と地域社会との繋がりは相対的に希薄化してきています。一方、総合学習の時間でのカリキュラム充実や登下校時における児童生徒の安心・安全の確保など、学校と地域社会の間には密接な連携を図ることが必要な事柄も多くなっています。今まで以上に、先生と保護者をはじめとする地域住民との信頼関係を強くすることが重要となっています。このため、これからのまちづくりにおいては、学校と地域の様々な場面での連携を可能にする、地域で学校を支える環境づくりを進めていくことが必要です。

②コミュニティが主体となった地域学を創造し、みんなで学ぶまちを目指す

大人になっても、南三陸町で住み続けたいと考える子供たちを育てていくことが、地域社会の担い手づくりの長期的な視点になると考えます。過疎化の遠因には、「郷土愛を育むことにあまり関心を払わず、都会にあるものの方が素晴らしいという価値観を伝えてこなかったか」という反省があります。

これからの地域の担い手づくりのためには、地域学を住民自らの手で興し、生涯

学習等を通じて、地域について学び、考えていく活動を活発化させていくことが必要です。民話や祭、食文化など様々なコミュニティの魅力、地域で生活していくための知恵や技を、地域の高齢者などの力を借りながら、子どもをはじめ、すべての住民に伝えていくことが重要です。

※地域学：地域の自然、人、事象などを学ぶことによって、個々人が郷土観を確立し、ひいては地域活性化や地域づくりへの動機づけを図っていこうとするもの。

③学びたいという意欲を尊重し、これを支援するまちを目指す

これからのまちづくりは、住民自らが知恵を出し、地域の環境を守り、産業を育成し、地域の安全安心を確保していくことが求められます。これを可能にするためには、子どもたちをはじめ、何かを学びたいと思う人の意欲を尊重し、住民一人ひとりが、自らの技能や知識を高めていくことを支援する仕組みづくりが必要です。

IV. まちづくり推進に向けての要望事項

本提言書は、南三陸町が目指すべきまちづくりの方向性や目標とすべきポイントについて取りまとめたものです。したがって、町にはこれらの提案を吟味し、具体的なまちづくりを進めていくことを期待しますが、その際、留意していただきたい点を、次のとおり要望事項として取りまとめました。

(1) 具体的な計画策定への住民の参画について

本まちづくり提言書は、まちづくりの方向性について提言を行ったものであり、各課題に対する具体的な解決策の検討は行っていません。したがって、今後、町が基本構想・基本計画を策定し、具体的な事業に取り組んでいく際には、何らかの形で住民が参画できるような仕組みが整えられるように強く要望いたします。

提言書の作成にあたり、まちづくりワークショップでは多くの議論を重ねてきました。その中で、私たち参加者一同、南三陸町に対する愛着が増し、「私たち自ら今後とも、積極的にまちづくりに参画していきたい」と実感しており、今後、南三陸町が協働によるまちづくりを進めていく上で、まちづくりワークショップのような活動は、大変有効であり、私たち住民が変わることで、行政の関係者も変わり、共に汗を流しながら、より暮らしやすい、未来に誇れる南三陸町のまちづくりに役立つものと考えます。

また、この提言書は、町行政に対する提言であると同時に、自治を支える町民へのメッセージでもあります。これまで、町民の中に「まちづくりを始めとした行政施策は役場がやるもの」といった考えはなかったでしょうか。一方、町は、住民意向を行政施策に反映させるシステムづくりに積極的に取り組んできたでしょうか。住民と行政の見解の相違は、協働によるまちづくりを阻む要因ともなりかねません。

以上の観点から、町民には積極的にまちづくりに参加し行動する意志をもっていただき、行政は町民が参加できる場や機会の設定、自主的な活動に際しての情報の提供、コーディネーターとしての役割など、町民が計画するまちづくりに関する事業を側面から支援する仕組みを構築することを要望いたします。加えて、具体的な計画等の策定に際しては、町民がそれに参画する仕組みを構築していただき、将来名実ともに町民と行政の協働により、理想とするまちづくりが実現されることを願っております。

(2) 戦略的なまちづくりを推進していくための仕掛けについて

これからのまちづくりは人や自然環境、歴史・文化など地域の資源を活かし、自立（自律）した地域を形成していくことが求められます。そのための施策・事業はどのような個別事業であれ、そういった地域の資源を有効に使いながら相互に密接に補完・影響しあう中で取り組むべきものと考えます。

例えば、観光振興ひとつを取り上げても、そこには農業や漁業といった一次産業の現場、観光産業としてのサービス業、特産品開発等に伴う雇用創出やこれまでなりわいを持たなかった人たちの就業機会の確保、ボランティアや経験を活かすことのできる元気な高齢者をはじめとする町民等々、多様な主体の参加、産業分野間の連携があって、はじめてトータルなまちづくりに繋がります。

そこで、総合計画の策定にあたっては、このような戦略的なまちづくりを展開するにあたり、まちづくりの方向性を具現化するために複合的に取り組まれるよう要望いたします。

V. おわりに

本提言書は、公募を通じて自主的・積極的にまちづくりワークショップに参加したメンバーが、自らのまちづくりの思いを託して、忌憚のない意見を出し合い、最終的に取りまとめたものです。これらの提言に示された内容が、南三陸町総合計画策定において活かされ、協働のまちづくりが実現されることを望みます。

○南三陸町まちづくりワークショップメンバー

阿部 長記	梶原 仁一	兼田 茂	◎後藤 一磨
昆野 慶弥	○佐藤 かつよ	佐藤 すみ子	佐藤 洋
佐藤 美和	高橋 昭夫	太齋 京子	元木 静雄
山内 完二	渡辺 由紀子		

※◎リーダー、○サブリーダー

(五十音順・敬称略)

○南三陸町まちづくりワークショップの開催経過

	開催年月日	主な内容
第1回	平成18年5月11日(木)	① メンバー紹介 ② まちづくりワークショップの目的と役割 ③ まちづくりワークショップの進め方
第2回	平成18年5月25日(木)	① 地域の環境と暮らし・なりわいのあり方に関する事前調書のまとめ ② 地域の環境と暮らし・なりわいのあり方について(グループ討議) ③ グループ討議のまとめ
第3回	平成18年6月1日(木)	① 地域の環境と暮らし・なりわいのあり方について(グループ討議)：第2回の続き ② グループ討議のまとめ
第4回	平成18年6月15日(木)	① 第2～3回の討議のまとめ ② まちの担い手のあり方に関する事前調書のまとめ ③ まちの担い手のあり方について(グループ討議) ④ グループ討議のまとめ
第5回	平成18年6月22日(木)	① まちの担い手のあり方について(グループ討議)：第4回の続き ② グループ討議のまとめ
第6回	平成18年7月6日(木)	① まちづくり提言書(草案)について(第2～5回の総括による内容検討) ② まちづくり提言書の取りまとめについて
第7回	平成18年7月7日(金)	① まちづくり提言書の取りまとめについて

○コーディネーター

財団法人 日本システム開発研究所 中山 幹生 ・ 佐藤 彰彦 ・ 岩淵 祐二